

桜美林大学・ダナン大学・上海理工大学共同シンポジウム

「日本機械産業の海外展開と東北・東南アジア地域における 国際分業ネットワークの深化」プロジェクト報告

松 尾 昌 宏

去る2月26日、ベトナムダナン大学にて、国際シンポジウムが開催された。本学とダナン大学との共同研究は、2003年度より始まり、シンポジウムの開催は、今回で5回目となる。うち、昨年度のみ、上海理工大学での開催となり、同大学の参加は今年で3回目となる。この間、ベトナム機械産業発展における日本の役割という基本枠組みは維持しつつも、より細部のテーマは毎年変化してきた。そうしたなかで、今年は上記の表題の問題がとりあげられた。以下に今回のベトナムでのシンポジウムの概要を記そう。

1. 工業団地見学の影響

まず、シンポジウムに先立ち、2月25日はダナンの「サイゴン・ダナン投資株式会社」を訪問し、インタビューを行い、その後ダナン市内の工業団地内のバイク部品工場2社を訪問した。その後、ダナン大学学長を表敬訪問し、プレゼントの交換をおこなった。

現在ダナンはベトナム中部に位置し、ベトナム第3の人口と良港に恵まれるという好条件により、ホーチミン、ハノイに続く新たな投資先として注目を集め、企業進出が急増している。さらに近年、日本の援助

も関わるインドシナ東西回廊の開通に伴って、インドシナ半島東部の表玄関という要素も加わり、その重要性はますます増している。インタビューでも、港湾能力を5倍に拡大する計画が進行中であり、また新たな工業団地が次々と開発され、電力などのインフラが整備されるなど、急速な発展ぶりが窺えた。

他方で工業、なかでも機械工業の発展はまだまだという印象であった。吉田三千雄産業研究所所長の話によると、訪問した工場のレベルは「1950年代の日本並み」とのこと、従業員はサンダル履きで、多くの作業は単純な機械を使っての手作業であった。設備の多くは韓国、台湾や日本の中古品であった。そんなこともあり、元々バイク部品工場とは言っても、日系組立メーカーに部品納入できる水準にはないとのことであった。さらに昨年のベトナムのWTO加盟に伴い、機械産業への保護もなくなる方向にあり、海外、なかでも中国からの輸入品との競争圧力にさらされる中、機械だけでは生き残りは難しく、金属加工の技術を生かして家具などのより加工の単純な他分野への進出を考えているとのことであった。どうもベトナム機械産業は、少なくとも当面は中国などとの競

争には太刀打ちできず、今後は低賃金コストを生かして、アジアの他国が賃金コスト上昇に伴って手掛けなくなった単純加工分野を後追いで拾い上げていく形でしか発展できないとの印象を受けた。とは言え、周辺国の賃金コスト上昇は急速であり、なかでも中国の賃金上昇速度はベトナム以上であり、また近隣の東南アジア諸国の所得水準もタイでベトナムの4倍、マレーシアで8倍といった高い水準にあり、こうした後追い戦略でも、当面は十分な成長は確保できそうである。実際、現在のベトナムの成長率は、毎年8～9%に達している。

2. シンポジウムの概要

翌2月26日は、シンポジウムが開かれ、ダナン大学ブイ・ヴァン・ガ学長、トラン・ヴァン・トゥ早稲田大学教授、吉田三千雄本学産業研究所所長の挨拶の後、日本、中国、ベトナムより、計6名の報告者からの報告があった。

まず始めは、本学博士で産業研究所のド・マン・ホーン客員研究員より「技術集約産業の国際展開」というタイトルで基調報告が行われ、日本の貿易、直接投資データを基に、従来の「雁行形態型」発展パターンに変化が起きており、日本からアジアへの産業技術移転のパターンが、より多元化しているという事実が指摘された。

次にダナン大学トルオン・バ・タン教授より、「ベトナム機械産業の国際経済への統合能力に関する研究：金融能力からのアプローチ」というタイトルで報告が行われ、ベトナム機械工業の競争力の分類に関する独自の統計的手法が示され、同法を用いたベトナム機械産業・企業の競争力の類型化が行われた。

次に上海理工大学の張永慶教授より、「「チャイナ・プラス・ワン」投資戦略とその日本機械産業に対する影響に関する研究」というタイトルで報告が行われ、1980年以降の日本企業の中国進出の波の動きが紹介され、また近年の日本企業の対中投資姿勢の変化がベトナムの発展に与える影響に関する考察がなされた。

午後の部では、トラン・ヴァン・トゥ早稲田大学教授より、「東アジア雁行形態型発展パターンとベトナム：自由貿易、キャッチアップ努力と機械工業」というタイトルで、東アジアにおけるベトナム機械工業の位置付けと、貿易自由化がベトナム機械工業に及ぼす影響、特に「自由貿易の罠」に陥る可能性と、その対策が示された。

次に本学産業研究所所長の吉田三千雄教授より、「日本機械工業による、東アジア諸国に対する生産手段の供給と、循環的発展の可能性：工作機械と産業用ロボット」というタイトルで、日本の資本財産業の世界における地位、対アジア貿易の推移と、貿易自由化が進む中での苦境、アジアとの共存の課題に関する問題の指摘がなされた。

次に上海理工大学の魏景賦教授より、「北部湾(トンキン湾)周辺地域経済統合についての試論」というタイトルで、ベトナム北部、北部湾(トンキン湾)周辺地域の経済発展の立ち後れの課題の指摘と、産業集積理論に基づく発展戦略、なかでもインフラ整備による中国華南地域との結びつきの重要性が示された。

最後に早稲田大学トラン・ヴァン・トゥ教授より、シンポジウム全体の総括がなされた。

次にシンポジウム全体の印象であるが、シンポジウムのテーマに関連付けて、そ

それぞれの国の報告者が、それぞれの国についてそれぞれの専門分野の観点から報告し、個別の問題設定には興味深いものがあつた。他方で、6つの報告内容は幾分統一性に欠け、言いつ放しに終わった感もあつた。また、シンポジウムのテーマに関連性の薄い報告もあり、報告内容に関する事前の摺り合わせがもっと必要であるように感じられた。この点は今後の課題であらう。

3. シンポジウム後の旅行の所感

2月26日のシンポジウム終了後、レセプションを経て解散となつたが、筆者自身はその後、ついでにカンボジアのシェムリアップ(アンコールワットの観光拠点)、タイのバンコク、ベトナムのハノイと見て回って帰国した。このうちシェムリアップとバンコクは、2001年の夏に、またベトナムのハノイは産業研究所とダナン大学の共同シンポジウムで2005年3月に既に訪れたことがあるが、この間の各国の変化には、大きなものがあつた。

まず、シェムリアップでは空港に着くなり、ターミナルの建物が一新されていることに驚き、また設備の良さ、サービスの迅速さに驚かされた。市内の道路は舗装が進み、大型高級ホテルや長期滞在者向けの宿泊施設の建設が急ピッチで進行していた。巨額のカネが落ちていることが窺われた。東南アジア最大の旧跡アンコールワットをはじめとする多数のクメール文明の遺跡群、トンレサップ湖(このクルーヅングはお勧めである)といった多くの観光資源に恵まれ、世界の主要都市からの直行便が次々と開設されていることもあり、いずれはインドネシアのバリやタイのプーケット等を遙かに凌ぐ東南アジア最大の観光保養

都市となるであらう。

また、バンコクでは、以前の市の北部のドンムアン空港に代わって2年ほど前に市の東部50kmのところのスワンナプーム国際空港が新たに開業されていた。その大きさは、日本の成田空港を凌ぐと思われ、設備も成田空港よりも近代的に思われた。空港から市内へは高速道路が整備され、ベトナムと比べるとタイはまるで先進国であつた。

その後再びベトナムのハノイに戻ると、一挙に途上国に戻つた感はあつたが、他方でターミナルから滑走路の反対側には巨大な新ターミナルが見え、ベトナムでも空港整備が急ピッチで進んでいることが窺われた(2年前にホーチミン市を訪れたときはやはり、日本のODAにより、巨大な第2ターミナルが建設中であつた)。

世界の貿易、投資の自由化が進む中、今後の世界の発展競争では、「国」よりも「都市」の魅力や競争力をいかに高めるかが、世界のお金を呼び込む上での鍵となる。世界の富の恐らく90%は、世界の陸地面積のわずか数%しか占めない「都市」から生み出されている。国土の広さは国富の増進にはあまり寄与しない。こうした中、都市のインフラ能力をいかに高めているかが問われている。なかでも空港整備は重要である。日本もそれなりにインフラ整備に努力はしているが、アジアの都市が急ピッチでインフラ整備を進める中、日本のインフラ整備に関する政策決定は、スピード感と戦略性に欠けるのではないか、このままではアジア都市間競争に立ち後れてしまうのではないかとの危機感を持った。

4.最後に

本年度をもって、これまで2年間にわたって産業研究所所長を務めて来られた吉田三千雄先生が退任される。当初引継の際は「1年だけ」とおっしゃっていたそうであるが、2年の任期を全うされ、またこの間、多くの日常業務に加え、研究所組織の改変という移行期の混乱に伴う会議の負担も負って頂いた(吉田先生、どうもお疲れ様でした)。来年度、吉田先生は、サバティカル(研究休暇)に出られる。

また、特別研究員で本学博士のド・マン・ホーン氏には、今回のシンポジウムでも、ダナン大学との連絡、企画、運営において、中心的な役割を果たして頂いた。ド・マン・ホーン氏の計画なしには、本シンポジウムの実施は不可能であったであろう。ここに記して感謝したい。ド・マン・ホーン氏は引き続き来年度も、産業研究所で活躍する予定である。

また、筆者が産業研究所事務主任になる以前から、5年間にわたって産業研究所の事務を務めて来られた石川久恵さんが、御主人の御仕事の関係で辞められる。

石川さんは、大変有能な方で、これまで事務方の面倒な多くの仕事にきめ細かに対応して頂き、我々の研究活動を支えて頂いた。産業研究所としては大きな痛手で残念なことではあるが、広島に単身赴任されていた御主人が、石川さんなしでは生きてはいけないとのことで、やむを得ぬこととなった。今後の広島での御活躍を祈りたい。

かくいう筆者も過去4年間、産業研究所の事務主任であったが、事務主任の任期は2年2期までということで、規程により今年度いっぱい退任する。思えば当初、岩井前所長に言葉巧みに嵌められる形(『産研通信』2006.3.31号、3ページ参照)でならされた役ではあったが、結果的には研究の増進に大いに役立った。これまでお世話になった岩井、吉田両所長、特別研究員のド・マン・ホーン氏、石川さんに感謝したい。

来年度からは新たに小松出先生が所長となられる。また、事務主任には若手のホープ、田村考司先生がなられる。小松新所長は果たしてどのような新企画を打ち出されるのであろうか。今後の産業研究所の研究の発展に期待したい。